



出ない妖怪



川崎ゆきお

「どうもいかなのう」妖怪博士が呟く。

「出ませんか」妖怪博士付きの編集者もため息をつく。しかし、この問題は最初から無理なのかもしれない。つまり、妖怪がなかなか出ないのだ。

そのため、最近は妖怪を見つける話ではなく、妖怪が出ない話ばかりになっていた。

「幽霊はよく出るのですが」

「ああ」

「靈感のある人が見たとか」

「ああ」

「何かコメントを、博士」

「範囲が広いからじゃろなあ」

「出る範囲がですか。でも幽霊が出る頻度も落ちているんじゃないですか。妖怪も落ちています。幽霊も落ちていると思いますよ。右肩下がりで」

「呪いとか、祟りとか、魔除けとか、そちらのほうは、まだまだ需要があるようじゃ」

「そうですねえ。占いなんかも流行っていますし」

「生活の中に入り込んでおるのじゃろ。妖怪のせいにするより、霊障にする。これは範囲が広い。それに比べると妖怪は遊びだ。そこが弱い。実用性がないためだ。それに昔のように妖怪の仕業としても、その妖怪に信頼性がなくなっておる。信じられんからのう。また、妖怪と結びつける人も希じゃ」

「博士はやはりどこかに妖怪は存在すると考えているのでしょ」

「いたりしてなあ」

「でも、出ないですねえ」

「噂も聞かん」

「困りました」

「形が欲しい。具体的な」

「それは動物を合成したようなものですね」

「よくミイラとなって残っていたりするのう」

「それはもうばれていますから、駄目ですねえ。形を追いかけても出てきませんよ」

「しかし、幽霊では駄目だ。妖怪でないと」

「でも、いかにも妖怪ですよっていう形の妖怪は無理なんじゃないですか。それらは江戸時代に書かれたものがほとんどでしょ」

「形になる前の何かがあった。そう思いたい」

「珍獣じゃなくてですか」

「広くいえばモンスターじゃ」

「はいはい。その線、いいですよ。拡がります。妖怪を魔獣として見れば、ウジャウジャいますよ」

「その代わりに、魔法使いもウジャウジャ出て来ようだろうなあ」

「それは怪人が出て来れば探偵が出て来る。探偵がいるから怪人が出て来る。これと似た構図ですねえ」

「そうじゃ。お祓い師がおるから、祓われるべき地霊やバケモノなどの対象が出てくる。どちらが先かは分からん。同時かもしれんしな」

「妖怪バスターがいるから妖怪が出る。と言うわけにはいきませんか」

「いかん」

「なぜです」

「街並みを見よ」

「はい」

「妖怪退治という看板はあるか」

「ない」

「ネタとして成立せんようになっておるのだ」

「靈感や占いはあるのに」

「妖怪はない」

「じゃ、先生の活躍の場がない」

「これは世間の油断じゃ」

「先生の油断ではなく？」

「今のところノーガードだ。妖怪に関しては」

「はい」

「この隙がどうも怪しい。厭な予感がする」

「意味が分かりませんが」

「妖怪はいないという常識に縛られ、出ておっても気付いておらんのかもしれん」

「はあ？」

「その場合、形じゃない。形としては見えん妖怪だな。まあ、むりとに形を作ることは出来るが、それは表示用でな。その実体は形をなしておらんかもしれん」

「それが博士が考えておられる妖怪ですか」

「ビジュアルがないので弱い」

「そうですねえ」

「気のせいだと言われれば、それまで」

「はい」

「ものの気配。これだな」

「また、考えておいてください」

「もう帰るのか」

「はい、テンションが下がりますから、今日はこれぐらいで」

「うむ」

了